

酒壺古墳と田辺城址

鈴木重治

同志社の田辺校地から、北側の竹藪を抜けて田辺城址へと向う。途中、式内社の酒屋神社を経て酒壺古墳を見る。

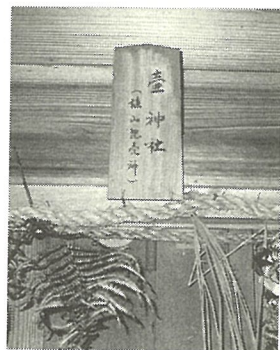
酒屋神社は、平安時代にすでにその存在が知られていて、社伝によると神功皇后が三個の酒壺を神社背後の山上に安置し、神々を祀ったことから社名が起きたという。また、河内国を本貫とする中臣酒屋連ナカトミイノカサムラジの一族が来住して祖神を祀ったとも伝えられ、酒造りの神として崇敬されている。

一方、本殿脇の境内末社の一つに、壇山ヒメヤマ毘売を祭神とする壺神社がある。この神は、酒器の材料となる粘土をつかさどる神であり、近くで発見された古墳時代須恵器の窯跡を考え合せると、関心が深まる。なお、

社殿の後の山は、粘土層を間層にもつ砂礫層の丘陵である。

葉を落した櫟が目につく冬木立の中を、身をかがめて枯れた小枝を拂いつつ、傾斜の強い酒屋神社の裏山を登る。カサカサと乾いた音が足許から拡がり、いばらがからむ。杉が植えられているあたりでは、晴れていても周りは薄暗い。ふと気が付くと、藪椿が一輪、木洩れ日を受けて紅をさす。ほどなく、低い丘陵の突端に出る。ここに酒壺古墳がある。

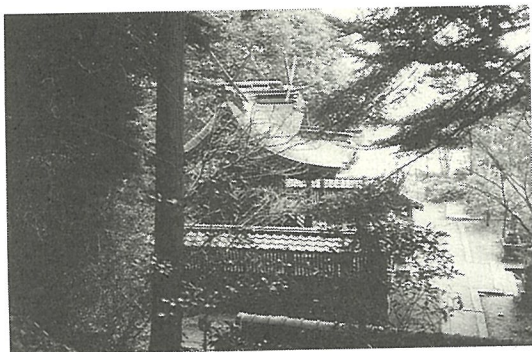
墳丘の上に立つと、北側に田辺城址のある丘陵が見える。この古墳は盛土の残りが良く、直径およそ七米、高さ三米もあろうか。興戸古墳群に属しているが、家形埴輪



酒屋神社本殿側面観。背後に酒壺古墳がある。

や碧玉製の腕飾類を出土した二号墳などの一群とは、小さな谷を挟んで離れている。

酒壺古墳は、未発掘のために主体部の構造や副葬品などは不明であって、考古学的に残された検討課題は多い。地元では、隣接する東側の丘陵の裾から須恵器の大甕が出土したことによって、古墳時代後期の年代が考えられたりしている。もし、横穴式石室が存在するとすれば、興戸古墳群中でも最も新しい古墳ということになる。つい先ごろ、田辺町の史跡に指定された天王のシオ古墳や、同志社田辺校地内にある下司古墳群(註1)などと同じような年代が考えられることで、六世紀から七世紀迄の築造が想定される。



壺神社のお飾り。酒屋神社の末社の一つ。

しかし、墳丘以外の遺構や遺物が全く不明の現段階では、他の手懸りを求めて遺跡の解釈を模索する必要がある。その方法の一つは、考古学が重視する遺跡と遺跡群の類型化であり、事実在即した観察が基礎となっている点で有効である。そこで、古墳周辺の歴史的環境について確認される遺跡群の分布を中心に、時代の推移を勘案して

具体的に整理してみると、遺跡群の構成上、特徴的なパターンの存在が指摘される。つまり、各地の遺跡群の構成と比較して、いわば南山城型とも呼べる一つの類型が認められる。

この遺跡群構成にみる類型の特徴は、古い郷村単位という小規模な範囲の中に、①古墳群、②白鳳から天平にかけて盛行した初期寺院址、③須恵器を焼成した古窯址、④延喜式神名帳に記載されたいわゆる式内社、⑤中世の城館址などが隣接して集中的に存在することである。①から⑤までの遺跡群は、それぞれに性格の違う遺跡でありながら、地域に根ざした時代の流れと特徴を良く反映していて、群としての類型化がおこなわれても、なお個性的な遺跡として存在している。

つまり、興戸・田辺地区では、①興戸古墳群、②興戸廃寺址、③宮ノ前古窯址、④酒屋神社、⑤田辺城址などが集中して分布し、同志社田辺校地を含めた普賢寺地区では、①下司古墳群、②普賢寺址、③まむし谷古窯址、④地祇神社、⑤普賢寺谷城館址

群などが分布していて、同じ類型が遺跡群の構成に見られながら、興戸・田辺地区の興戸古墳群には前期古墳があるのに対して、普賢寺地区では後期から終末期の古墳のみが知られている。また、普賢寺地区には中世後期の国人衆や地侍の城館址が、丘陵の端部や裾に群をなして並ぶのに対して、興戸・田辺地区では単独に田辺城址が丘陵頂部に存在している。これらの事実が、個々の遺跡からも、それぞれの個性がうかがえることを示している。

田辺城址の土塁や堀り切りを観察するためには、田辺町役場に通じる起伏に富んだ裏道を通り、興戸古墳群の標柱のあるあたりから、西側の竹藪に入るのが良い。丘陵の頂部が広く削平されていて、隅々に突出した張り出し部を認める主郭に立てば、西寄り低い土塁が認められる。自然地形を生かして築城されているが、北へ延びる丘陵は防禦のための堀り切りによって区画され、土橋状に削り出された通路で北側の郭と連絡している。この丘陵の先端は、更に北へ延びて物見場として城址の一部を構成



新島記念講堂塔屋から北西を望む

- 1、酒壺古墳
- 2、田辺城址
- 3、女子大知徳館西端

に先立つ文明年間の『多聞院日記』に登場する「田辺の公文」や「田辺殿」らにとつては、田辺城はかけがえのない歴史の舞台であつたに違いない。

ちなみに、春がまだ浅い夕日を受けて田辺城址に立つと、新島記念講堂で奏でるカリヨンベルの音色が、澄みきつた風に乗つて谷を越え、竹藪を通して渡つて来る。

つまり、酒壺古墳も田辺城址も、歴史の生き証人であると同時に、田辺校地周辺の自然景観の中に溶け込んでいることとなる。

(大学校地学術調査委員会調査主任)

していたが、町庁舎と田辺公園の造成によつて削平されて姿を消した。

平安京遷都千二百年流に、南山城の歴史の転換期を振り返れば、昨年が丁度山城国一揆解体五百年に当る。つとに知られる『大乘院寺社雜事記』の明応二年(一四九三)九月十一日の条によつてあきらかのように、稲屋妻城に閉籠して討死した数百名の中に、田辺の住人も含まれている。それ

- 註1 同志社大学校地学術調査委員会
「下司古墳群」一九八五
- 註2 中井 均「南山城地方の中世城郭跡」一九八二

